

京城だより②「芥川龍之介全集」未収録資料紹介 : 宮崎光男との親交をめぐって

巖, 基権
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/20300>

出版情報 : 九大日文. 17, pp.2-33, 2011-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

京城だより②

『芥川龍之介全集』未収録資料紹介

——宮崎光男との親交をめぐって——

嚴基權

今回は「京城日報」における『芥川龍之介全集』の未収録資料を紹介する。「京城日報」には芥川龍之介という名前で書かれている文章が二つ見当たると。まず、芥川が「京城日報」に小説を寄せる友のために書いた文章を紹介する。

新作小説連載豫告

山中峰太郎氏の傑作小説「愛別の十字路」は最後まで高潮した氣持ちで讀者をひきつつけ、感興のままと、なつてゐたが、いよく近く大好評のうちに完結いたしました。引續き新進作家會心の力作として左の一篇を掲載いたします。特に作者と親交のある芥川龍之介氏の紹介文を左に……

小説 途上 宮崎光男作 梅津星耕畫

本篇の作者のために 芥川龍之介
本篇の作者宮崎光男氏は私の年来の友である。氏は創作慾を藏しつゝ、東京日日新聞記者としての十年間

を送つた。その間日日紙に、松浦貧郎といふ變名で、朝鮮を題材とした「沼の彼方」といふ一篇を連載したことのある以外、氏は創作をものしたのを見ない。従つて、今、どういふ傾向のものを書かうとするか、それを詳にし得ないけれども、とにかく、氏の筆力は信頼するに足ると思ふ。友のために一言する。「京城日報」大正一五年七月二四日夕刊五面

大正一五年七月二四日に「京城日報」に掲載された以上の広告文は芥川が自殺する丁度一年前に書かれたものである。広告文の中には「京城日報」に新しく連載され始める小説について、作者宮崎光男の言葉の代りに芥川の紹介文が掲載される。宮崎光男という名前は芥川全集でも確認できない、あまり馴染みのない人物のように見える。しかし、宮崎の略歴を覗いてみると、芥川との接点が垣間見えてくる。では、このように当時の文壇の大家であつた芥川に、朝鮮の新聞に小説の紹介文まで書かせた宮崎光男という人物は何者であつたのか、また芥川とはどのような付き合いをしていたのだろうか。一先ず、当時宮崎が勤めていた読売新聞社の記事や復刻版『新聞人名辞典』三卷（昭和六三年二月、日本図書センター、以下『新聞人名』と略す）を参照しながら宮崎光男について見てみよう。

宮崎光男は明治二八年⁽²⁾八月二〇日、佐賀県の東松浦郡唐津に有浦生まれの人である。別名は北村豊太郎、松浦貧郎⁽³⁾。どのような理由で朝鮮に渡つたのか詳細は不明だが、大正二年三

月に京城にある善隣商業学校を卒業している。その後は、朝鮮銀行、日本電報通信社、福岡日日新聞社、實業之日本⁽⁴⁾を経て、大正五年九月に東京日日新聞社社会部に入る。大正一五年一月には読売新聞整理部に移り、昭和五年の新愛知新聞社を経て、昭和六年一二月に再び読売新聞社に戻って昭和二〇年一〇月の退職まで勤める。

こうした宮崎が芥川といつから交流し始めたのかは定かではない。が、芥川の死の直後に宮崎の書いた「死直前の芥川君」〔読売新聞〕昭和二年七月二六、二八日／三回連載、以下「死直前」と略す〕で「僕と芥川君とは、十年この方の交友である。」と述べられている。また、宮崎が戦後に書いた「芥川龍之介と菊池寛」〔文藝春秋 所収、昭和五年一月、以下「芥川」と略す〕で、「この二人は、わずかに相前後して親しくなつた私の亡友で、いま生きていれば、交遊三十幾年ということになる。二人があとで『文豪』と呼ばれるようになったことなどは、私らに、そう大した關係はない。どちらも『新思潮』の卵として、また世間に賣り出していなかつた頃からの、へらず口をたゞき合う友で」あつたと回想していることから推測すると、おそらく宮崎が東京日日新聞社に入る大正五年あたりから二人の付き合いが始まつたと思われる。

その後の宮崎と芥川との親交の様子は、前述したように全集にも宮崎に関する書簡などの資料が収録されておらず定かではない。しかし、一方的ではあるが、二人の友情を伺えるようなエピソードを宮崎は「芥川」に綴っている。その中で興味深い

のは、『日本の女』の由来と『偷盜』の横行」である。「日本の女」は大正一四年四月、五月号の「婦人画報」に二回発表されたもので、二冊の洋書についての紹介が書かれてある。この文章が発表された動機について「芥川」には、お金に窮していた宮崎が芥川のところに駆けつけて、事情を説明した後、「何か談話をしてもらつて、私がそれを筆記して、芥川に筆を入れてもらつたうえで、一枚十圓見當で『婦人畫報』に賣り込」んだということが述べられている。つまり、宮崎自身の私事の理由で芥川に原稿を書かせ、「日本の女」の原稿料をもらったことになる。こうした宮崎の身勝手な要求にすんなりと応じながら、芥川は宮崎を「世の中に出してくれた恩人」と言つたという。同じ文章によれば、芥川は「そうさ、恩人でなくて何だ。あのとき君が、有名でなかつた僕の小説（『偷盜』のことだ）⁽⁵⁾を、廣く世間一般に讀まれる新聞というものに、はじめて拾いあげて載せてくれたからこそ、僕というものゝ存在が擴大されて行つたんじゃないか。あの御恩は一生わすれやしないよ。」と、宮崎に対して感謝の気持ちを表したという。

この様に芥川龍之介と宮崎光男との付き合いは、金銭的な問題についてもすんなり聞いてくれる、仲の良い間柄であつたと思われる。大正五年ごろから始まつた親交は芥川が死ぬ直前まで続いた。前記の「死直前」でも最期に面会した時の芥川との思い出が綴られている。その中で、宮崎は「京城日報」に小説を寄せた当時の話と共に、小説が途中で中断になつた理由を次のように述べている。

「ぢや僕（注―芥川）は、君（注―宮崎）にすつかり濟まないことをしてしまつたよ。許してくれ給へ。」

「え？」

僕は譯がわからなかつた。

「それ、去年のその頃さ、京城の新聞に小説を書くことになつたから、僕の提灯文があれば一層都合がいゝつて、君がさういつてよこしたことがあつたぢやないか」

「うむあれか、あの駄小説か。ハ、ハ、ハ、ハ、」

僕は、今考へれば缺點だらけでしかも、不穩味が祟つて中絶したその小説のことが、むしろをかしかつた。（それによつて、兎に角も、下仁田生活の後期三ヶ月ほどを糊したことは、猶一層をかしかつたかも知れない。）が、その稿料の出鱈目な遅れ方から、僕と妻との間が眞暗闇になりくした深刻さを思ひ出すと、笑ひ沙汰などではない。かう書いてゐる今でもひんやりとして慄えるのを覺える

「でも、それほど君の生活を支配しつゝあつた小説に、僕のツボラから、ウンと提灯を持たなかつたことは、僕として友達甲斐のないことだつたよ。失敬々々。がしかし君も、君の生活的事情について僕に詳しく報ずるところのなかつたのは、ちよつと手落ちだな。」

芥川君は、僕がそれについて何も思つてゐはしないのに、いつまでもこだわつてゐるのだつた。がしかし僕は、そこに動く芥川君の友情のこまかさを思ふと、涙ぐましいうれしさと感謝とを感じた。（注は嚴）

以上の文章からは、宮崎と芥川とがかなり親密な關係にあつたことが窺える。しかし、芥川の全集や研究書などに宮崎に関する資料、特に書簡がほとんど存在しなかつたためか、二人の交流についてはこれまでほとんど知られてこなかつた。こうした意味でも芥川が宮崎光男という友の為に直接書いた「提灯文」は貴重な資料になると思われる。

もう一つの資料は「夏の感覚」という隨筆である。大正一四年七月一日付の「京城日報」に掲載されており、芥川の季節、特に夏に対する感想が淡々と綴られている。この中で芥川は、夏が嫌いな理由について夏の暑さ、匂い、それから夏の單調さを挙げてゐる。この様な夏に対する窮屈さは、同月九日の「京城日報」に掲載された萩原朔太郎の「夏とその情思」にも似たような感想が述べられている。最後に、「夏の感覚」と共に、付録として「京城日報」に収録されている芥川龍之介に関する評論、教育者で児童心理学者の高島平三郎の「芥川君の死」や佐藤春夫の義弟である古木鉄太郎の「作家印象記（二）芥川龍之介氏」と、矢野白雨の「芥川氏の形相」、茶谷八郎の「詩歌に現れた芥川龍之介」、「全集となる芥川作品」、平井保興の「芥川追悼 文藝講演會雜記」や佐藤圭四郎の「有島武郎と芥川龍之介」などといった資料も同時に掲載しておく。

【注記】

1 作者宮崎光男の言葉が「京城日報」に掲載されるのは、芥川の紹介文が掲載された三日後の大正一五年七月二十七日である。朝の三面には「小説

途上明日より掲載」という見出しで「作者の言葉」が書かれている。その中で宮崎は小説の内容と共に「年少時代の数年間を」朝鮮で過ごした事について述べている。

2 宮崎の生まれた年について、『新聞人名』の二巻と三巻にはそれぞれ明治二〇年と記されているが、三巻には明治二八年となっている。どれが正しいかは定かではない。が、宮崎の訃報の記事が掲載された「読売新聞」（昭和三年九月二五日夕刊、以下「読売」と略す）に、宮崎の年が六三となっていた点、また、同じ記事で大正二年三月に京城にある善隣商業学校を卒業した点から推測すると、宮崎の生まれ年は正しくは明治二八年だと思われる。

3 広告文にもあるように宮崎は松浦貧郎という筆名で「沼の彼方」を「東京日日新聞」に大正八年六月六日から同年七月二七日まで、全四五回連載している。

4 経歴について「読売」では、「福岡日日、実業之日本」となっている。が、『新聞人名』の二巻には「佐賀日日新聞、実業之世界」、二巻には「佐賀日日」、三巻には「福岡日日、実業之世界」とある。実際にどこに宮崎が勤めていたのか定かではないため、ここでは「読売」の記事を基にしている。

5 果して「偷盗」のことであったかは疑問である。「偷盗」は周知のとおり、大正三年四月と七月発行の「中央公論」に二回に渡って掲載された作品である。「芥川」で語られているように、「中央公論」は「廣く世間一般に讀まれる新聞」ではない。「芥川」における「廣く世間一般に讀まれる新聞」に「はじめて拾いあげて」という表現に相応の背景があるとすれば、「僕の小説」とは、「偷盗」ではなく、「戯作三昧」ではないだろう。

うか。「戯作三昧」は芥川の小説として初めて「大阪毎日新聞」夕刊（大正六年一〇月二〇日から一月四日まで連載）に発表されている。その連載時宮崎は東京毎日新聞社の社員であった。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年）

凡例

- 一、芥川龍之介の全集未収録資料の翻刻に当たり、本文表記は原則として原文に従った。
- 一、漢字は可能な限り、原文そのままの旧漢字で、仮名遣いも歴史的仮名遣いで表記した。なお、判読不可能な文字は(■)で記した。
- 一、ルビや句読点も原文のままに付した。ただし、活字がつぶれ、判読困難な場合は一般的な読みに従った。
- 一、句読点、太字、傍点も原文のままに記した。
- 一、各資料の最後に、掲載された日付、朝夕刊の別、掲載面数を付した。

夏の感覺

芥川龍之介

夏の感覺——
夏が來るといふ事によつて私共の生活に起るいろいろの變化、それは私の云ふ限りでもなく、又私自身として

さうした方面から夏といふものを考へ度くない。純粹に夏そのものだけの感じについて云ひ度い、此の意味で考へてみれば比較的夏といふものは私に面白くないのである。何故かといふに、その理由を云つてみると三つある第一の理由は、夏は暑い、その暑いといふ事が——それは

冬にも共通する事だ——が私の心をうばひ、肉體に非常に不愉快を興へてゆく、肉體が不愉快だと私は藝術的鑑賞が出来なくなる、例へば一匹の蚤が身體にくいついてゐると、如何にいい音楽でも、又名優の名技でもそれをちつと鑑賞してゐる事が出来ない、その気分といふものは全くこはされてしまふ、のと同じである第二の理由は、夏は匂ひといふものがあまりに單調過ぎる、私は常に外へ出た時、動坂から私の自家までの路を歩いてゐる間に、いろいろの匂ひを感じるのであるが、それが夏になると非常に單純になつてしまふ、花の匂ひ、果物の匂ひ、落葉の匂ひ、土の匂ひと一番匂ひの世界に豊富であるのは、秋にしくものはないが、それにしても夏はこれらの

匂ひがあまりに單調である、第三の理由は、敢て夏のみでなく冬もさうであるが、夏は極端な氣候であるだけに味がないとして強烈な色を持たながら複雑した色を持つてゐない、例へば初夏の潑刺たる嫩葉の色のやうな丁度京洛の祇園から東山を望んで見るやうな嫩葉の交叉した光りといふものは全く感じられなくなつてしまふ、それが又秋が來

るといふくの色を持つ、それを考へると夏はどうも私には好ましくない。さうした單調な夏の中で感銘の深かつた事を考へてみると、夏の最中に秋を感じる事である、曆の上でも立秋にはまだ遠い炎熱の眞夏の中に、何かの拍子に、樹の葉をわたる風の音づれや、蔭を見て直ぐ秋の來てゐるのを感じる事がある、それと同じ様に、

非常に夏らしい感じをうける事が夫にある私はあまり外へは出ずに、多く自分の家の庭だけを見て四季の訪れを感じてゐるが、夏、殊に眞夏には、暑さのために庭の土が焼かれて非常に荒れてゆく、それは冬霜枯れのために土が荒れてゆくのと同じ位にいたいたいしい、やな感じをうけるけれど、其れを含んだ土が蒼々とした苔に日の光りを浴びながら輝いてゐるのを見る時荒れ土からうける凄慘な感じといふものより全くはなれて、如何にも夏らしい感じをうけるのである故に私にとつて、一番讚えたい美しい夏の感じは、夏にはなくてむしろ春にある（「京城日報」大正一四年七月一日五日期刊一画）

【付録】

芥川君の死

△……芥川君の自殺を新聞で知つた時私は、ほんとうに惜しい事をしたと思つた、かつあゝした、まじめな人のことであ

高島平三郎

るからそのこゝに至るまでには可成つき詰た事情もあり又心境もあつたには違ひないと思ふがしかしそれは必ずしも自殺そのもの辯護にはならない

△……元來全體的に見て文士は醫學的に素因をもつ、つまり文士は一般の人々より遙かに神經質で一寸とした事にも夫を深刻に考へて處理しようとする傾向をもつてゐる加ふるに芥川君の場合は兩三日續いた酷暑と例の小學生全集の刊行に關する世俗的な面倒くさい事件は遂に極端に神經質な芥川君を自殺にまで誘つたものであらう

△……然し原因、理由は何であるにせよ私は自殺それ自身を絶對に認める事が出来ない總て人生は如何なる場合においても自殺する必要はないと思ふ飽くまで戰ふべきであると思ふ若自殺者といふ自殺者がこゝろく佛教の因果といふことを理解してゐたならば恐らくは自殺しないで濟んだことと思ふ、芥川君もまた必ずやあんな事にならずに濟んだことと思ふ、即ち總ての自殺は無信仰が生んだ悲劇であると斷ずる

△……尤も乃木將軍の自殺の如きは世人はこれを殉死と稱して大いに美化して考へてゐるがしかも自殺そのもの感心出来ない事は同じである、又或る女がゐる自分の貞操を守るため對手の男に抵抗して殺されたとか、或は死ぬば貞操を全うすることが出来るといった様な場合なら問題は自ら別である

△……何にしても世人は決して感傷的にこの事件を見ては

ならない冷靜に批判して誤らぬ斷案を下す用意が肝要である、私は芥川君の自決が一般的に流行せねばよいがと心配してゐる(「京城日報」昭和二年七月二十九日朝刊一面)

芥川氏の形相〔上〕

矢野白雨

一、私が芥川龍之介氏と初めて面談したのが、大正十二年の震災直前であつた。その後一二回面會したのみに止つたが、その間私の眼に映じた氏に對する印象とも申すべきは、見るからに秀才らしい感じのする人で、しかも氣のきいた氣品の高い人であつた。

そして龍之介氏が今日の偉をかち得たのも恐らくこの秀才がものしたものであつたらう。

そこで私は龍之介氏のおもかげを偲ぶ時常に、シヨウペンハウエルの天才は眞理を直覺的に認識してこれを表現するに對し、秀才は眞理を論理的にきはめて、これを説明することが巧妙で鋭敏だ、といった言葉を思ひ起す。

そして龍之介氏は常に後者の秀才論に尤もよく合致した人物であつた。シヨウペンハウエルの「天才は眞理を直覺的に認識して文を表現し、秀才は論理的に究めて、これを説明するに巧妙で鋭敏だ」といつたことを別言すると、前者は詩人的であり、後者は科學者であるといへる。

よつて龍之介氏自身や氏の作品が科學者のそののやうに冷たい理智を基調として居たことも、氏の作品に接した人々の等しく認め得たところである。

シヨウベンハウエルのいはゆる秀才型であつた龍之介氏、又科學者につめたい理智をもつてゐた龍之介氏は、その作品において、表現しやうとするよりも、まず説明しやうとしてゐる、あるものを創造しやうとするよりも、たゞ説明しやうとしてゐた。この説明しやうとすることも、氏自らもつてゐないものを他人に見せる爲に感しさせる爲に、説明しやうとするのである。そこに龍之介氏および氏の作品の特色があつたのではなからうか。

そしてそれは時に詩の様に見えることがある。けれどもそれは決して詩ではない。そして又龍之介氏自身も詩人ではなかつた。

「詩は實在するものである。すくなくとも、その詩人の心には實に實在するものであらねばならぬ」と誰やらいつた。然るに龍之介氏の藝術は、氏自身の心に存在してゐなかつた。龍之介氏は詩人が何よりも自分自身を夢見やうとするに對し、何よりもまづ他人に何物かを見せ様としてゐた。これが龍之介氏の前半における藝術的傾向であつた。自分自身に詩を持つてゐる詩人にとつて、努むべきは、その心の詩を様式化することである。即ち表現することである。これに反し自分自身に詩を持つてゐない者にとつて、詩らしい物を製作し様とするに於いて努むべきは巧妙なる胡

魔化しでなければならぬ。

しかして龍之介氏が、そのために發揮したものは、實に秀才である氏にとつて、最も自然な奇智であつたのだ。

龍之介氏の作品にうかゞはれる恰も直覺の如く見え、詩の如く見ゆるものは、それは奇智であつた。氏の作品の殆どは、この奇智的説明の奏功せるものではあるまいか。

試みに龍之介氏の傑作とも稱すべき「山鳴」「神々の微笑」を讀む時、これ等も遂に一見奇智的説明だと思へぬ程巧妙に奇智だけを切り離して描いて見せたものであることがわかる。

そしてその明かなる論據は、龍之介氏の作品には詩の如く見ゆるものはあつても、實際の詩はない哲學の如くに見えるものはあつても、實際の哲學のないことである。「京城日報」昭和二年八月一〇日朝刊六面)

【下】

内容があつて形式が後からこしらへるものであることの謬見であることを、それが如何して證明して居ることにならう。

同じく「點心」の中に「藝術は表現にはじまつて表現に終る、畫を描かない畫家、詩を作らない詩人、など、いふ言葉は、比喩として以外には何等の意味もない言葉だ、それは白くない白墨といふよりもつと愚かな言葉と思はなけ

ればならぬ云々」、これも龍之介氏の謬見ではあるまいか。これによると氏は、描かれた畫、作られたる詩は■でも、描かれない畫作られない詩の存在を知り得なかつたのではあるまいか。

從つて氏にとつては詩人といふ言葉、畫家といふ言葉は單にその人がある時、詩を表現し畫を描くといふ意味以外に何物もなかつたといふ様に受け取れる。

私は眞の詩人は、詩を表現する前にすでに詩人であり、眞の畫家は畫を描かない前に既に畫家である。ゆえに詩を作り畫を描くことは、單に詩人であり畫家であるといふことには、それ程重要な問題ではないと思ふ。

かゝる點が西行、芭蕉と龍之介氏とが外形的にのみ似てゐて、内面的の世界において共通點を見出せなかつて所以ではあるまいか。

しかし最近の龍之介氏の作品はこの自己の藝術觀の謬見を自覺して來てゐた様である。氏の藝術の徹頭徹尾自ら生活から生れて來て居た、否龍之介氏の生活の一部であるといつてもよい位、骨の髄の髓までも藝術家になつてゐたされど矢張り氏は芭蕉等と共に平行し得ぬ藝術家であつた。吾々が西行、芭蕉等の作品に接する時■にこの感深くするものがある。即ち西行、芭蕉等は天才的藝術家であるに反し、龍之介は科學者的な藝術家であつたことであつて、西行、芭蕉が百年に一人しか出ないとすれば、龍之介氏の如きは、二百年に一人出ないであらうと思はれる。

程偉いとすべき人物であつた、

兔も角我文壇にあつては、恰も明星を取り去られた如くにさびしさと悲哀を感じ得ない。(京城日報)昭和二年八月三日朝刊六面(八月一日朝刊、二日朝刊、夕刊の現物の確認が出来ず、「上」と「下」の間に「中」の文章が存在する可能性もある―嚴注)

詩歌に現れた芥川龍之介(上)

東京にて 茶谷八郎

虫干の意味ではないが、午後の暑さの所在なきに、不圖思ひ出して、久しく顧みないでゐた机のまはりを片付けはじめた、——私は或る人からは非常に綺麗ずきのやうに見られてゐるし、或る人からは大變だらしないやうに思はれてもゐる、どちらも本當なのであらう、私のもつて生れた性格が、私の移り遷り行く環境にいつかさうなつて行つたのである、これは私の總てに對してもいひうる——で私はその時、私自身でも一寸おやくと思ふくらゐるバカな潔白さに支配された人のやうに、實に叮寧に、そして甲斐々々しく、整理し初めたのである、しかし笑ふべし半にいたつてもう駄目だつた、目にふるゝもの皆、懐古の因とならざるはなしといつたやうな、センチメンタルに溺れかけたのである、それでいゝ加減に切上げやうとしたが、つひくひかれ氣味で、ホコリを一杯かぶつた古雑誌や切抜帳や古原稿をわけてゐた、その時私は裏表紙のとれた中央公論を見つけた

ので、なに心なく目次を開くとそれには、忘れもせない「現代藝術家余技集」が載てゐる、そしてその中に芥川龍之介氏の作も含まれてゐるのである（大正十一年の三月號）

○
いますこし詳しくいふと、それには「我鬼抄」として句三十句、歌十六首、それに我鬼筆にかゝる色紙短冊が一ツ宛版にして挿入してある、大正十一年といへば左まで古くないから、大方の記憶するところであらう、が、その日は芥川龍之介氏が、自ら生命を死なしめてより、數ふれば恰も初七日に當たるのであつたから、なほ更、遂に私をしてこの一文を草せしむるにいたつた。

○
人の「死」に對して兎角何か「言いたい」のは人情のしからしむるところであらう、その方いづれにしても、殊に自殺の場合においては。しかしいづれの場合も問はず輕々に放言すべきでないことだけは明かである、いはんやその眞意を曲解し故人をきずつけるやうな放言をするにおいてをやである——私は今こゝに芥川龍之介氏の死に對し多くの人がなした（また今後もなすであらう）それ々の讚美批判を問はんとするものではない、寧ろそれ等の總てに對し、たゞ前言を繰返したいだけである（私は世のいふところの道學者流な「それによつておよぼす社会的悪影響」などは左程重大視しやうとは思はぬ、たとへ、それによつて直に影響を受けるやうな者は所詮、おそかれ早かれ、さういふ道をたどら

ねばならぬ人々であると思つてゐる、かういふ極論をさへ持つ私である、但徳富蘇峰氏の「生活の興味」なる一文は再讀の價值があることをいひたい」（「京城日報」昭和二年八月一八日朝刊六面）

（下）

さもあらばあれ、私はこゝではたゞ「我鬼抄」について記せばよかつたのだ、たゞありし日の詩人芥川龍之介氏を忍べばよい……。

元日や手を洗ひをる夕心

私の愛唱する句である、この句の境地こそ氏のすべてであると思つてゐる、味はへば味はふほど、汲めども盡きぬ、さういつた詩境がこんくと胸に迫つて來る、今にしてこの句を唱せば文字通り憂鬱である、しかしさういふのは句そのものに對してはやゝ考へ過ぎると思はないこともない。麥埃かぶる童子の眠りかな

「洛陽」と題する一句である、古典的な氏の一面を最もよく語つてゐる、私はさう思つてゐる。

曇天やまむし生きゐる鱧の中
可成り評判になつた句だと記憶してゐる、當時のいはゆる「新理智派」と呼ばれてゐた氏の作が、句の上に現れた見逃せないものであらう、しかし私はこの句は左程とりたくない。寝てゐれば夜長の疊匂ふかな

確 中村憲吉氏だつたと思ふ、寢床から疊へ下りたその低さを詠んだ歌があつた（覺えてゐないのが一寸残念であるが、後でしらべて見よう） 私は今この忘れてゐた句を見て、ふと、そんなことを思ひ浮かべた、そして遠く芭蕉をおもふのである。

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

「伯母のいふ」と註のある一句である、私達はこの短い註を見逃してはならない、この註があればこそこの句の眞價が判然する、贅言は要しないであらう。

氏の歌は殊に子規の流れを汲んでゐることが明かである、子規と親交のあつた漱石の門に入つた人として寧ろ當然であらう。

うす曇るちまたを見つゝ、暗緑の玉子食ひをれば風吹きにけり
これは後に「支那游記」一卷をものした「上海」の一首である。てらふ氣もちなどみぢんもない、純粹の歌人としての氏が、實に悠然と現れてゐる、私の愛踊歌の一つだ。「暗緑の玉子」は如何にも曇天の上海に相應しい、特にこの歌は、齋藤茂吉氏の歌における風格さういふものが感じられる。

窓のへにいささむら竹軒のへに糸瓜ある宿は忠兵衛が宿

きみが家の軒の糸瓜はけふの雨に臍腐れしやあるひはいまだ「小澤碧童」の二首である、忠兵衛いふものは俳人碧童氏の名前である、いはゆるアララギ流のリズムといふことを最も重視した歌で、「忠兵衛が宿」も随分きいてゐるし、また

「臍くきれしやあるひはいまだ」も實にいひ得て妙である、ともに私のすきな歌だ、かういふ歌を見ると、私は作家芥川龍之介としてゞなく、歌人芥川龍之介の方をより多く懐しみたい、これは私のひがめであらう。私だけにいはしむることを故人がゆるすならば、純然たる歌人として後半生を精進してもらひたかつた、と。だがこれは余りに非禮ないひ方である、詫ねはならない。

冬心の竹の晝見に來、ひさかたの雪茶を煮つつわが待つまことに

「となりのいもじ」秀眞先生に、といふ註がある、また私の愛唱、おく能はざる歌ではあるが、驚くほど子規が髣髴とする、それでゐてよく、芥川龍之介になつてゐる、前の「きみが家の」以上に子規といふ大きな顔がのぞいてゐる、子規といふ大きな影がさしてゐる、私自身考へたいのである、註にある「秀眞先生」といふのは、同じ田端に住む鑄金家、東京美術學校教授香取秀眞氏のことである。

○

以上「我鬼抄」の作はことごとく舊作ばかりで、故人は或るひは迷惑は思はれ、「近作」もこゝに合せ引用せねばならないが、今私にその用意がないのは残念である、いづれ稿を新たにし、もつと私も考へたい。

顧みれば、私の最初の企圖である「我鬼抄」想記以外に、余りにいへどもものを書いたやうである、それを悔いつゝせめても、橋田東聲氏の追悼歌 芥川龍之介氏の死書

くもの面影さへも鶴に似てけ高き人を死なしめにけり——
を附記してもらひ、この稿の筆をおく。(完)「京城日報」昭和二年八月二〇日朝刊六面

全集となる芥川龍之介の作品

百ヶ日に豫約を締切る

芥川龍之介氏が自殺して、一世を驚かした事はまだ記憶に新しい處であるが、丁度今日がその百ヶ日にあたる。そして芥川氏の全作品を網羅した「全集」がその百ヶ日の間に全く準備をととのへ、豫約募集をし、因縁深い今日その申込みを締切らうとしてゐる。吾人もこの人生の殉教者芥川氏の全集が大いに世に迎へられる事をよそながら祈つてやまないものであるこの全集が成功するか否かといふ事は、氏が思ひを遺された遺稿のために大きな問題であらうし、又編輯に携はつた友人諸氏にとつても大きな關心事であらうと思ふ菊池寛氏初め、久米正雄氏、小島政二郎氏、佐々木茂索氏などこの全集のために自ら進んで忙しい中を東奔西走されてゐるといふ事をきくたびに涙ぐましい氣がする。芥川氏の遺言により全集の刊行を引受けた岩波氏も、營利を念頭に置かず一意専心立派な全集を作る事を宣言してゐる。この様に一切が純眞になされてゐる「全集」の豫約募集が成功するか否かは營利を第一の主眼點と

してなされた多くの一團本界にとつて一つの眞實がまだ迎へられるか否かを計り見るパロメーターとも考へられはしないだらうか。われ等のはかゝる意味においてもこの全集が成功を納める事を切望するのである。

コリ性の芥川氏が單行本として出した作品に一度訂正を加へて保管して置いたのがこんどの全集の底本となつていふ事を聞いてゐるその他書簡講演ノートなど、又芥川氏が生前一度も發表した事のない戯曲がこの中に納められてゐるといふ事などもきいてゐる。その他、柳川隆之介といふペンネームで發表してゐた時代のものもありすべて芥川氏の書いたものは斷簡れい墨も洩さぬやうに努めてゐる相である。裝幀に苦心してゐる小穴隆一氏は故人の最も親かつた友人の一人、編輯にあたる同人は皆文壇にそうくたした諸氏でありその刊行をする岩波書店の態度を思ふ時われ等はこの全集に一人も多く申込んで貰ひたいと思ふのである。

〔京城日報〕昭和二年一月二日朝刊六面

芥川龍之介追悼

文藝講演會雜記(上)

東京 平井保興
四五日前慶大の講堂で、文藝春秋社主催の芥川龍之介追悼文藝講演會があつた時、行きたかつただけども、生憎用事のためそれがかなはず、このたび東京で第二

回目的講演を丸の内の報知講堂で聞く事にしたが、私は實のところ報知講堂で聞くよりは慶大の講堂で聞きたかつたのである。といふのは速記をとりたかつた爲である。慶大の講堂では聴講者の或る一部分の椅子には、簡単な机を代用する設備があるので、ちよつと速記をとるにも便利であるが、報知講堂にはさうした設備がない……最も膝の上にノートを置き頭をさげ背を圓くしてペンを走らす事は出来ないでもないが、それは随分苦痛でありかつ長時間堪へるものでない……それで速記をとるのは止めにした。従つて私がこれから記してゆく各講師の講演の内容は、簡單で余りに概念的過ぎる程概念的なものであることを斷つて置く

× ×

開催は午後一時といふに、正午を少し過ぎた頃すでに講堂の大方は男女學生の聴講者で満ちてしまつた。そうして定刻には場内立錐の余地もなく、なほ場外に溢れるもの多し者數知れずといふ盛會振である。

やがて萬雷の如き拍手のもとに開會の辭とあつて佐々木茂索氏が登壇する。氏はテーブルの中、夫に立つて、右の手をスポンのポケット深くに納め、左手をテーブルの上に軽くのせて、聴衆を正視しながら極めて口早なさうして枯淡な調子で話してゆく。

私は講演會の仕事や芥川全集の出版の仕事で急がしいので、この講演で何に話をさうかといふ準備も出来てをりませんで、この地方で講演する「肉體と文學」といふ話を簡単に述べ

る事に致します

とまづ冒頭に述べ、身體を丈夫にすること……身體を大切にしなければならぬといひ芥川氏が痲疾の神經衰弱に悩んでゐたといふことから、芥川氏の作品の内にもその病弱に對する悩みといふものが現れてゐるといひ、その例を一二摘示した後、再び身體を丈夫にしなければならぬといふことで簡單に結んでゐた。

次ぎは「追憶二三」といふので南部修太郎氏の登壇。氏は聰明に輝くひとみ、終始温情的な笑みをたゝえてゐる明るい容貌で、テーブルの中央に上半身を心持ちかゞめ、左右の兩腕をテーブルのはしにさゝへて、明快に言辭を運んでゆく。

私はプログラムにも乗つてゐません通り飛入りで……久米正雄君が風邪を引いてゐるから應援を頼むといふので、突然に出て來たやうなわけです、さて何に話をさうかと色々考へてみたのですが、どうもいゝ考へが浮びませぬので、「追憶二三」といふことで何にかお話をしやうと思ひまして、今もこちらに來る電車の中で考へたのですが、その時ふと芥川君が亡くなつてから今日で幾日になるかと思ひまして一つ二つ（指折り數へる）と數へてゆきますと、丁度今日で芥川君が亡くなつてから九十日目に當るのであります……私は今でも芥川君が亡くなられたとは、どうしても思へないのであります。かつて夏目漱石先生が亡くなられた當時、久米正雄が「先生がどうしても亡くなられたとは思はれない——とい

うことをよくいつて居られました、私は芥川君が亡くなつたとはどうしても思へないのであります。今でも芥川君が彼のぎつしりと詰まつた本棚を脊にして、愛煙してゐたパイプトを斯う口にくはえ（右口唇に左の人指し指て煙草を深くくはえた時のやうにして見せる）すばりすばりとパイプを吸つてゐる姿がよく目に見えます。また私が書齋で讀書でもしてゐるとき、「芥川さんがお見得でございます」と女中が取りつぎに来るやうに感じられる時が今たにあります。と感慨深さうに述べてゆけば、多くの聴衆と氏と共に芥川龍之介の追憶の情こまやかな雰圍氣に、深くつゞまれてゆくやうな氣配だつた。「京城日報」昭和二年一月八日朝刊六画

(中)

かくて氏は文壇人として芥川龍之介の藝術に對する熱意と、眞劍と自覺などを簡單な例をひいて、自分の今知る範圍内において芥川氏藝術に對して熱心な人を見たことはないといひ。また社會人としての芥川氏の一面を例して紹介し、文壇人としてまた社會人としての故人の徳の追憶をしみじみと雄辯に物語つてゆけば、滿場は水底のやうなしめやかな深い靜寂と、氏の炎のやうな辯によはされた數千の聴衆は身じろぎ一つせず可憐な女學生などはすでに感激の涙をひとみ一杯うかべてゐる者さへあつた。惠

まれた秋麗らかな小半日を一代の鬼才大芥川龍之助を追憶するにふさはしい講演會は益々佳境にはいつてゆく。やがて破れんばかりの拍手に送られて南部氏が降壇してゆくと間もなく演壇に現れたのは今評判の小島政次郎氏である。

氏は色々な意味でなんとなくスケールの大きな男だといふ感じを氏の容貌、體軀乃至言辭を通じてうかがはれる作家である、「後輩の見たる芥川龍之介」これが氏のいはんとする題である。

東京の講演の事や、地方の講演のうち合せや何にかで急がしいものですから……今日此の講演が終へますと、十時卅分の夜行で盛岡の方へ田舎廻りの講演に出かけます。そして三十日に歸まして三十一日の日、朝日講堂で再び講演會を開きますが、それも合せてお聴き下さると甚だしあはせに存じます。と氏はテーブルの内側を右端中央左端といふ風に、そらく身體の位置を換へ初め、夫をくり返ししながら、その動作と明るい表情を終りまで續けてゆく。

……そんなわけで東京で講演するタネがまだ仕込んでありますので（笑聲起る）最も私の芥川觀は既に新聞や雑誌で書き古されてをりますのでよんどころなく田舎廻りのタネで（再び笑聲……田舎廻りなんていひますと地方の人を侮辱してゐるやうに聴へまして甚だ失禮ですが……田舎廻りのタネで御許しを願つて置きます最も私が偉らさうなことを饒舌りまして、また芥川さん程偉らくありませんので、如何かと思ひま

して（笑聲起る……最も芥川さんと私はたつた一つ違いなん
ですが、芥川さんはあんなに偉らくつて私は……
と諧謔をまじへて満場をどつと笑はせ、更に故人の徳を
たゝえてゆく。

私は芥川さんに啓發されてゐる處は少くありませんでした……
私が結婚するとき芥川さんが仲介人でありました（笑聲起
る……）……佐々木茂索だつてさうなのであります。

と満場を笑酔させてゆく。それから人の世話をよくやつた
芥川氏を氏自身の例を引

私が家を持つたに就て、芥川さんが一軒めつけて呉たので
すが、御承知の通り昔の建築は兎も角、近頃の安建築になりま
すと、柱に米材が使つてあります芥川さんがめつけて下すつ
た家は此の米材が使つてあつたのです。然し折角めつけて下
すつたので、御好意を無にしてはと思ひまして住むことにな
つたのですが、御承知の通り米材はヤニを澤山もつて居りま
す。ですからうつかり柱に寄りかゝりますと、ヤニがべつと
りと衣類につきまして、容易に離れ難くなります。ですから
小島の家は後ろ髪を引かれるやうな家だと、友人からよくい
はれました。

と盛んに笑はせた上故人の德行を二三述べた後

芥川さんといふ人は直接といふよも間接に多く人に親切を盡
された方でありませう
と結んで降壇する。

×

×

その後を井汲清治氏が「近代文藝の一特徴」といふ題下
のもとに近代の作品の一つの特徴として、かつてまではそ
の作品の内容が、徳義上如何はしく思はれるやうな作品
を、近代においては堂々と發表をしてはゝからないうやうにな
つた……最も徳義上如何の問題は別問題として……かゝ
る傾向が近代文藝の一つの特徴であると述べ、更に作品
の批評價値に論及して、例へば新潮社の合評會の如き、
その作品の内在的價値、即ち技巧の巧拙のみを論じて、
何等外在的價値（もしもかうした言葉がいへるならばと註
す）……文章の價値にはその評をおよぼさないといふやう
な事柄から、將來の文藝批判の行くべき道は、内在的價値
と外在的價値と相まつてゆくべきではなからうかといふ結
論を下して降壇すれば（『京城日報』昭和二年一月九日朝刊六面）

（下）

つぎは「ヒステリーと文學」といふので佐藤春夫氏が激し
い拍手に迎へられて登壇する――芥川も私も共に痲疾の
神經衰弱で――といふ言葉を冒頭に立て、いはゆるヒステ
リーと文學論に這入つてゆくのであるが、氏はテーパーの中
央に左ひじをついて右の腕をテーパーの一部にさゝへて身
體の中心をはかり、うつむき勝ちに話しながらときどき顔を
上げるのだが、神經衰弱のためであらう、氏は非常に苦痛
のやうに見える……その喘ぐやうにして一言一句比較的小さ

な音聲で論述してゆく氏の様子を見てみると、私は非常に氣の毒のやうに感じられて、ともすれば氏と共に私もなんとなく喘ぐやうな氣持ちにさへなつてゆく。その爲氏の論者^{マダシ}が私にはつきりと聞きとれなかつたし、余りに今の私の^{わたし}に漠然とし過ぎてゐる論旨の記憶をこゝに記すことは、氏の論旨を冒瀆する恐れがあるので遠慮することにして

次に登壇した菊池寛氏の「文藝觀賞とその意義」に移ることにする。

氏は彼のどつしりとした體軀でテーブルの左端に立つて、原稿五六枚を机上に置くと、身體にふにふに合ふ小さな聲でまづ芥川氏の思ひ出しを語つてゆく。

芥川と私が或る時、數寄屋橋から日本銀行の方に向つて歩いた時の事です、突然芥川が私の側から離れて五六間をへだてた向側の方を急に歩き出したので私が「君……君、どうしたんだい——といひますと芥川が「君あすこに馬があるだらう——といふのです、見るとなる程私達が歩いてゆく先方に馬があるのです。ですから——彼の馬がどうしたの——と聞きますと芥川が「君、馬には常識がないからね——といふのです。なる程馬には常識がありません。

と話を結んで、芥川氏が細小なことにでもよく注意する男であるとして、更に今一つの思ひ出話を移つてゆく。

それは氏が芥川氏と共に或る時地方に講演旅行に行つた際氏が眠れないので芥川氏から睡眠劑をもらひ、それを

多量に呑み過ぎ二日程意識が朦朧として今少しで死ぬ處であつたと述べ、その時芥川氏が睡眠薬で死ぬことが出来るといつたと、氏にしてはそれは感慨深いであらうところの思ひ出に必々としてゆけば、壇上に述べ懐する氏も聴衆も共に故人追慕の情に堪へぬ感慨の色が深く動いてゐた。やがて思ひ出話をそれに留めて本論に這入つてゆく。

一つの物を觀賞するに際して、そこに文藝を通じてみると、そこに美の深さを見る事が出来る述べ、例へば今こゝに海を見るとする、その海を見るに際し、そこに海に關する文學……海の文學を通じて見るとき、その海に對して一入の美を見ることが出来る。さてこゝに一つの山を見るにしても山の文學を通じてその山を見ると、山に一入の美を感じみられるものであると述べ、更に、今こゝに一つの或る物を見るとき假定してその一つの物をたゞ單にみる眼を丁度こゝの處とする（とテーブルの上を右の手で軽くなでし）つぎに神のみる眼をこの邊とする（と右の手をテーブルの上から一尺程上げて示し）そして文學を通じてみる眼は丁度この邊になる（と左手をテーブルの上と、神のみる眼を示す右の手との中間に上げて示し）つまり文藝を通じてみる眼は神のみる眼に近い、即ち神に近いのであると結論して降壇をする。

最後に登壇したのは泉鏡花氏、題は「おやつ頃」氏は小柄な體軀で強い近眼、そしてちよつと見ると、どこかの

番頭さんよろしくの姿である、演壇のテーブルが高いので——まるで頸だけ出してゐるやうです——とまづ笑はせる。テーブルの中央にちよこんと立つた氏は愛嬌たつぷりの好い叔父さんである。「私はこれから寸法といふことについて少しお話を致します。」を冒頭に、かつて氏が紅葉の門下であつた當時の話に移る。

私は紅葉先生の玄關に居りましたとき、ある時先生の奥さんが私に一枚の羽織を下さいました着てみますとそれが（といひ乍ら両手を袖の中に入れ、その袖口をプラープら振つて見せ）丁度こんな具合で手が袖口に出ません。奥さんに聞いてみますと大人並みにこしらへたのださうです（笑聲起る）つまり私の身體の寸法に合さずに作つたから斯うなつたのであう。と述べ更に能役者の袴に寸法を言及しやがて——芥川さんといふ人はこの寸法といふことをよく心得た人でありました——と結び次ぎに古來よりある童話から色といふことを論じて——芥川さんといふ人はこの色といふことをよく心得た人でありました——と結んで賑かな拍手に送られて降壇する。

かくてよき秋の日は暮れ近く、日比谷あたりの空に夕焼き雲が静かに動いてゐた。（完）（京城日報、昭和二年一月一〇日朝刊六画）

有島武郎と芥川龍之介と（一）

圭四郎

有島、芥川とかう二人の名前を並べてかけば諸君は一八、アまたか—と思ふだらう。それ程この二人の名前は種々の雑誌新聞に論じられ今日にいたるまで機会あるごとに、興味湧きたびごとくに引あひに出される。一たい何がわれわれをかうさせるのか。しかもその結末はいつでもきまりきつたやうに「敗北の文學」であり、プロ文學禮讚のための前座位でしかなかつた。しかも私は今また「點鬼簿」の中の二人をひつぱり出さんとしてゐる。再々の誘引で故人には甚だお氣の毒の至りではあるが、どうもわれ々の興味を湧かすやうな考へさせるやうな作品をのこしておいた結果だと思つて辛抱して貰ふことにする。

有島と芥川——人道主義者有島ははなやかな女性を道づれとして浪漫的色彩のなかに情死を遂げ、理性の人芥川は氷のやうに澄み切つた孤獨のなかに自らの生命をたち切つていつた。前者は階級的苦悶に後者は藝術至上主義の中にいづれも自滅していつた。もはや有島武郎と芥川龍之介は永久に存在しないであらう。しかし日本の知識階級のなかには果して有島芥川的存在は潰滅していつたであらうか？いはゆる自殺せざる生ける有島、芥川は日本の知識階級のなかに存在してゐないであらうか？日本の知識階級は有島、芥川が経験したところの深淵と障壁の前に立ちふさが

つてはゐないだらうか？若立ちふさがつてゐるとするならば有島、芥川を檢討することはわが知識階級にとつて興味以上の關係をもつてゐるといひ得るであらう。しかし、彼等は存在してゐるのだ、日本の知識階級の自覚しつゝある人々の多くは有島、芥川がぶつかつたところの深淵と障壁の前に立ちふさがりつゝあるのである。しからば有島をして「三千世界は見開いた目」といはしめ芥川をして「莫然たる不安」といはしめたものは一たい何であつたか。有島、芥川はなぜ自殺したか。私はそのことに異常な關心をもつ。

さてわれ、日本の知識階級は一たいこの二人の作品およびその死によつて何を考へてゐるのか。この二人は同じやうに當時の文壇での人氣作家であつた。しかし彼等はまたその人氣にいゝ氣になつて矢鱈に「新聞もの」「婦人もの」を書きはしなかつた。また同様に彼等は物事を眞面目に見、かつ考へた。しかも彼等はいづれも「人生の行き詰り」を感じこの「どうにもならない人生」のために遂に負た。これだけならべてみてもこの兩者の存在と死はたしかにわれわれの考察のよき對象たることを失はないであらう。この場合前者に波多野秋子があり後者に「スプリング・ポート」たる女人があるといふやうなゴシップの材料や兩者ともに極度の神經衰弱症による病的状態にあつたといふやうな、またその他すべての個人的家庭的條件を捨象してしまつての話である。

もちろんかゝる條件はその死の動機を促した一の素因と

なりうることは出来る。しかしながらその動機は少くともこの素因を促進せしめた根本的の契機ではなかつた実に有島をして「三千世界は見開いた目」といはしめ、芥川をして「莫然たる不安」といはしめたものは、かうした個人的家庭的の諸條件以外に存じてゐた。

私は今この二人に多少似通つた作家としてチエホフとモオパッサンを擧げる。「鷗」「三人姉妹」にあらはれた憂鬱と「死の如く強し」や「赤道直下」にあらはれた強熱とアンニユイは「ども又の死」「骨」や「齒車」「阿呆の一生」のなかにうかゞはれはしないだらうか。チエホフとモオパッサンをもつて自然主義作家中の一の高峰に數へることに何人も躊躇しないであらう。あらゆる偶像とげん影と誇張的感情とを清算して現實の奥底に徹底せんとした自然主義の理想は遂に「現實はニヒルである」といふ結論を得てあらはれたのである。自然主義はもろろん十九世紀の急速なる科學的生產關係の所産としてあらはれたものであつた。しかしながら「自然主義」なる一種の文學的思潮はそれ自身においてかなる使命をもつてゐたか。自然主義はもろろんその目的において現實暴露を主眼としてゐた、しかも現實のいづはらざる客觀的な記述といふことは一見極めて尤もらしい考へである。がこれは幸にして十九世紀より二十世紀初期にかけての現實の暴露であつた。それは資本主義機構が漸次その複雑さを増し同時にそのカラクリを幾多の魔術的的作用によつて糊塗せんとはしめた時代である、例へば家庭

趣味における殊更に煩雜にしてかつ莊麗な儀禮、軍國主義における形式美といつたものが極めて露骨にたい頭しはじめたのである。或ひは忠君愛國の近代的精神といつてもよろしい。とにかくさういふ一種の■神化的精神の現れである。しかるに自然主義はかういふいかめしい物界を剝奪して白晝の下に震へ戦く現實の解剖を目的としてゐた。しかも自然主義そのものは十九世紀の科學的世界觀の當然の所産である。してみれば自然主義はそれ自らの母胎を裏切らねばならないといふ破目に陥つたのである。すなはち當時のブルジョア思想の極度に尖端化されたものはあらゆるもの分析のメスをふるふことによつてこれ自らを否定せざるを得なくなつた。けれどもその分析のメスの先からは解剖■上の醫學の知識のやうに簡單にかつ明確に新しい知識を受取ることは出来なかつた。本能に生きるありのまゝの人の姿——その到達したものは僅にこれに過ぎなかつた。ただしその主眼とした分析的捨象そのものが同時に方法であり目的であつたから。そこにこの障壁を打越えて質的變革をもたらさずべき指導原理を持ち得なかつたのである。同時にこの到達せる状態においてこれはその有する使命を盡くしたともいひ得ないのである。「京城日報」昭和五年二月一日朝刊六

(二)

それ自らにおいてそれ自身を否定する矛盾を含むこと——人はこれを簡單に辯證的と説明するまさに辯證的である。思想史の説明としては私もこれに異論はないだがそれ自らにおいてそれ自身を否定すべき矛盾を含むことはこの矛盾に生きつゝある生ける人間にとつては常にこの矛盾の意義——この矛盾を止揚すべき統一が與へられねばならぬではないか。問題はこゝにある。しかもこの意義が見出だせなかつた時、または見出だしてもこの意義を意味づけるべき具體的形態をとり得なかつたとき行くべき道はたつた一つである。それはニヒルの道である、その結果は人生の行きづまりといふやうなことになる。自然主義はこの意味においてたしかに動きがとれなくなつて來たのであつた。結局これはその藏するむじゆんを解消すべき打開の道が見出だせなくなつて來たのだ。どうにもならぬこの袋小路を脱却すべき道——それは舊寫實主義の提唱する社會的人間、階級的人間の發見によつて打開されたのであるが、舊寫實主義による自然主義においてはたかく、「沒理想」に納まるより仕方がなかつた。これを一面よりいへば、そしていさゝか景氣のいゝ言葉をつかふと「崩壊」であり「没落」であつたこれはなんでも複数で片づけるやうとする社會學者のいひ草ではある。がしかし自然主義の崩壊没落はロシア帝政がひつくりかへつたナポレオンが島流しにされたりしたや

うな悲壯な感情を伴ふロマンチイックではなくて實態は細りつゝある蠟燭の燈が將に消えんとする時の如く哀れにも慘めな姿であつた、そして恰もこれは有島の死體からウジが湧いて發見されたり、芥川がペロナール——實は猫いらずかカルモチンならなはこの場合によく適合するのであるが——で死んだことはじつにこの鳴物入りの「没落」の現象形態であつたのである。

私は古臭いかびのはえたやうな自然主義論などを余りになく振舞はずことを恐れる。これにも拘らず敢てしたといふのは思想上において自然主義がなしたやうな矛盾がこの二人の思想の中にやゝ類似してあらはれてゐることを知らんがためなのである。

さて親愛なる諸君よ？

モダンエーヂを特徴づけるものは何であるか。？キヤフエであり、シネマであり、クララ・ボウでありジョージ・バンク口フトでありジャズであり、マネキンであり、圓本であり、ダツチカウトでありラツパ・ズボンであり、そしてマルクス、エングルスであり、スターリン、ブハリンである。うぬづれ強き先覺の士はこれを大別してアメリカニズムとルシアニズムとに分けて説明する。しかししてれば所詮真正正銘のところ「没落」のやうな景氣のよきそな合言葉でしかないのだ。すくなくとも私にはこれほどにしか響かないのだ。「現代はテムボとスピードの時代ですな」とひなことを婦人雑誌の座談會の席上で葉巻の煙とともにいひ得る知識販賣業者の

反面において私がいまいつたやうな矛盾が不斷に或ひは不用意にその頭角を現さないと誰がよく保證することが出来やう。輕快の反面に不安があり、享樂の■に苦惱が潜んでゐる。(京城日報 昭和五年二月一三日朝刊六面)

(三)

文藝復興期の思想、啓蒙期の思想、自由主義しかして社會主義——これらの主義思潮の初期においてその先端を切つたものはいづれも知識階級であつた。その時代々の生産關係に相應せる思想を構成したのも、それは知識階級にしてよくなしうるものである。しかし不斷に尖锐化しつゝ、ある人間の知識を代表する知識階級の思想が支配階級によつて代表される舊思想の支持を受けてゐる間は、知識階級の持ついはゆる進歩思想は安全に進歩することが出来る、しかるにこの思想が更に進んでその支持者たる支配階級の保守思想を裏切る場合、こゝに進歩思想は保守思想に降伏するか或ひはその寄生的形態を脱して斷然反逆するかの選一的状態にたちいたらねばならない。しかも有島、芥川はいづれもこの選一的状態の立場に立つたのである。彼れ等の思想は到底支配階級の保守思想を容認することが出来なかつた。かれ等の天廬ともいふべき眞面目さは益々その進歩思想をかつて遂には支配階級の保守思想に斷然反旗をひるがへすにいたつた。しかもその結果はどうであつたか。かれ等

はその思想を進展さすことによつて益々苦悶の中におちこんでいつたのであるその思想はあらゆる傳統を打破つて勇ましくも保守思想に叛逆を試みていつたが、彼等の生活はそれが維持されてゐる傳統を左様に簡単に打ち破ることが出来なかつた。そして生活と思想は次第に矛盾を深めつゝ遂にかれ等は死の深淵に顛落していつた。知識と生活。思想と傳統。知識階級の矛盾離反する生活態度のじめじめした中に有島、芥川は眞面目さゆゑに死をもつてそれらの一切の矛盾を解決していつた。

いま有島の場合を考へて見る。有島の初期米國遊學前までの思想は完全にキリスト教思想である。これは札幌農學校の校風とそれに刺戟されて入信することによつて得た自由主義的な獨立教會の影響とのために氏の若い胸に芽ばえたものであつた。次に思想の一轉は米國前後にはじまり大正五、六年までを一區劃とする人道主義的主張である。同時にこれはまた個人主義に徹底せんとするもので、この時代の過程は「迷路」に描れたやうな殆ど絶望的な必死的努力によつて得られたものである。氏はこの個人主義を次の如く説明してゐる。「私は徹底的に自己本位の人間であらうとしてゐる。この立場が徹底的に實現されるやうに自分の生活を導いて行かうとしてゐる。たゞし私が欲する所の生活を組立てゝ行くためにはやむを得ず環境に働きかけて行かねばならぬ場合が生ずるかも知れない。：縦令然しかゝる場合が生じてもこれは私が社會をいくらで

もよくしやうといふ誓願なり野心なりから生れたことではなく、私が現在の私自分を住みよくしやうための必要から惹き起された事柄に過ぎないのだ」（自己の要求）。これは前時代において「神」といふ偶像によつてすべてを判断せんとしたキリスト教思想に對する叛逆であるとも、そこに自我の發見が生じ、この價値が重視されたことを示す。同時にこの環境との關係は「個性は環境に頓着なくその内部的要求を以て生活す」べきであり「個性は絶対の自由を捕へうるために生きるがい」……が「個性以外のものに如何なる暴威を振舞ふともこれは環境を私の生活に攝取するために私自身の姿に從つてこれを創り直さなければならぬ」。氏はこゝでまつたく主我的であり主觀的である。氏のかゝる傾向はその後更に進んで動向の一元を主張し「われわれの生活において一瞬間でも煮つまつた場合に立つた經驗のある人は誰でも知つてゐる如く、人は本心から動いてかゝる時にはそこにはもう努力の必要などはなくなつてしまふ。即ち理智分別の境界は失はれてたゞ一の道のみが残される。しかしてかゝる瞬間がわれわれにとつて一番大きな飛躍の出来る瞬間である」（筆頭語）において最高潮に達してゐるのである。かゝる主我的な個人主義思潮はまた大正の初年度に旺盛を極めた我國一般の思想でもあつた。特に氏の所屬してゐた「白樺」一派の人々にはこの思潮の最先端に走つてゐたのであるから氏もまたこのやうな傾向にあつたことはむしろ極めて自然なことであ

つた。これはいはば、知識階級の啓蒙期を特徴づける一のラヂカリズムであつた。

「己れを主とする以上、他人にもおなじ心のあるのに注意しよう。自分の自由を守ると同様な氣持で他人の自由を守らう」「凡ての事業とその報酬とを自己のなかに求めるよう。自己の成就すること、それがそのまゝ報酬であつてその他には一の報酬もあり得ないことを充分に體得しやう」「己れを主とするもの」かゝる個人主義に根ざす人道主義は氏の作品の隨所に發見することが出来るものであつて、またこれをかたく信じてゐた時代の作品は氏の作中その最高峰を形づくつてゐた。氏が北海道における四百五十町歩の農場を小作人に與へたのも、一切の所有關係を斷ち切つて、その生活をペンによつて支へやうと決心したこともないしは社會運動にたいして多少とも物資の補助を惜まなかつたこともみな「自己に忠實に生きんがため」であつた。しかも氏はかゝる生活態度を一言で「愛」であるといふ。他を愛するといふことがその實自己を愛することなのである。「愛は惜みなく奪ふ」によつてこの愛の見解は遺憾なく述べられてゐる。

このまゝで進んで満足してゐられればそれでいゝのである。だが反省のメスはこのまゝにやむべきではなかつた。そしてその先端にあつたものはおどりの「階級の苦悶」といふ奴であつた。「京城日報」昭和五年二月一四日朝刊六画

(四)

前述したやうに知識階級の有する特徴は新知識の追及にある。がこれがこの階級を支配する支配階級を裏切つたとき、問題はにに生ずる。知識の進歩は必ずしもこれに伴つて生活態度の變革をもたらすものではない。何ゆえといつて知識はあらゆる傳統を打破つて進むことが出来るが生活はそれが維持されてゐる傳統をさやうに簡單に打ち破ることは出来ない。かくして知識と生活はこゝに相反することになる。例へばいまこゝに小説家があつて、勞働者を主題とした小説を書くとする。このとき彼は勞働者の生活状態を描き出す場合に、もし彼が單に書齋の机の上で書かうとするならば彼はあきらかにそこにギヤツプを感じなければならぬ。またかうした階級意識をもつた畫家がカヴァスに向ふ際、花や裸體のみ描くものとすれば彼はこれにたいしあきらかに不滿を感じるであらう。彼等は彼れもその新興階級を支持すべき意志を有しながらその生活態度は依然として舊來の傳統にとらはれてゐるのみである。かくして二律背反の世界ははじまる。これが生活に多少の余裕のある人間ならまだしも、一管の筆をもつて日常の糧をうる者であり、しかも生活のためにのみその意志とは獨立な作品を作るべき状態に置かれたとき、この苦悶は次第にその度を増して行く。有島の場合にはまだしもかゝる生活の保證があつたからその度は少かつた。しかしそれでもな

ほ「文化の末路」を感じざるを得なかつた。私はかく知識階級をその彼方に追ひやる力を「正義感」とでも名づくるものであらうか。考へて見れば知識階級の根本的支持力ともなつて動くものはこの「正義感」以外に何があらう一八〇年代「民衆の中へ」の叫聲はもちろんこれによつて社會進展の道程が變化されべくもないが、しかもなほ二律背反の知識階級にとつては、その行動を正常化する唯一の方法ではあるまいか第四階級以外の階級に生れ育ち教育を受けた有島が、第四階級のために辯護し立論し、運動する。そんな馬鹿げたことは出来ない……といひながらその奥底にすむ「正義感」は依然としてこれを欺くことが出来なかつた。

有島は實によく第四階級のために辯護し、立論し、かつ運動した彼の意志は明らかにブルジョアの思想に反旗をひるがへした。そして第四階級の運動に滿腔の熱意と同情とをもちつつ階級闘争による第四階級の勝利をかたく信じてゐた。そして社會の歴史的進化的の上に基礎をおいたマルクスの科學的社會主義の實現を待望した。かくして彼は階級闘争に對しての知識階級としての■を「自己の問題」として深く意識せざるを得なかつた。そして彼が彼の周囲を見渡した自分自身を内省することによつて彼はますます生活と思想、傳統と知識の大なる■を痛感せざるを得なかつた。彼は幾度となくブルジョアの保守思想にたいして反逆を試みた。彼の燃えるやな熱情と眞面目は幾度となく彼を

して勞働運動のたゞ中に進入しゆくことを宣言した。がその瞬間において、彼は自分の生活といふものが依然としてブルジョア思想の傳統の下にあることを感ぜざるを得なかつた。かくして有島は幾多の血みどろな戦ひのち遂に空しい結論に到達しなければならなかつたのである。すなはち知識階級に屬するものは勞働運動の理論的實際的指導者となることは出来ないといふことを。またこの階級に屬する人々が勞働運動なりもしくは第四階級の文化運動に加はることは越ゆべからざるものを越えることであること……かくして遂に有島は「宣言一つ」において悲痛なる判決を自らに下さざるを得なかつた。彼はこゝにおいて極力ブルジョアとプロレタリアの生活態度を區別した。そして前者の意識は結局いかにしても後者の意識となり得ないことを絶望的に述べた彼の判決に従へば實に知識階級に屬するものは財産有無にかへらず勞働者とは全然別個の世界の間であつた。しかも有島は社會主義運動の勝利をかたく信じてゐたのである。「京城日報」昭和五年二月一日朝刊六面

(五)

かくして有島はやがて來たるであらう社會主義の勝利を前にぬかうとしてぬげきれなかつたブルジョア思想のしつこい殻のなかにまさしく「文化の末路」を感じざるを得なかつた。かれはいかにさびしい孤獨を感じたであらうか。かれは

勝利を信じつゝも依然としてその運動に参加することの出来ぬ自分の境遇——思想、意識、生活あらゆる一切のもの——をかなしんだ。と同時に知識階級の没落を見ざるを得なかつた。社会主義運動に對する當初の熱切なるかれの奇與はこゝにおいて全く否定されてしまつた。そしてかれは悲痛にも絶叫した。「どんなえらい學者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭梁であれ、第四階級な勞働者たることなしに第四階級に何ものかを寄與すると思つたら」それは「明らかに「上沙汰であら」もしくは第四階級はその人達の無駄な努力によつてかき亂されるのほかほかないものである」と「たとひユーロピヤ的な社会主義から哲學的のそれになり、遂に科學的の社会主義が成就されたとはいへ、學說としての社会主義は遂に第四階級自身の社会主義であることは出来ない」と。知識階級としてその教養なり思想なり殊に感情なりが略奪階級のお役に立つやうに仕向けられて來てゐたことを余りにも信じてゐた有島はたとひ知識階級がその經濟關係において當然ブルジョアに屬するとするも所詮知識階級はその思想、教養、感情においてブルジョアであることを叫ばざるを得なかつたのであつた。かくして「民衆の中へ入らんとして入り得ざる苦悶は有島にあつて極點に達した。かくの如く苦悶の状態にあつたゞ一の逃避は藝術の陶醉境に游飛することである。人が何といはふとひたすら自分の藝術の完成に没頭することである。まことに藝術の最高潮は圓滿自足を享樂することである。この一點にのみ生きうる人間は他の何事をも

臨まないであらう。しかし有島にとつてはこの境地に安住してゐることは到底出来なかつた。何ゆえならず有島をはぐくんた個人主義といふ思想そのものが資本主義の一形態としてクラルテの彼方に素晴らしい勢ひをもつて起りつゝある、日々尖鋭化しつゝある社会主義の下にそれ自らの爛熟によつて没落の道をたどりつゝあつたからである（「京城日報」昭和五年二月一八日朝刊六面）

(六)

元來この個人主義といふ思想は資本主義の一形態として派生したことは日本の資本主義が明治末期より歐洲戦亂の大正にかけて急速に進歩すると共にこれと歩調を同じうして個人主義思潮が擡頭したのでも明かである。即ち「他は他己は己」の思想であつた。吾々は巨大なる其組織の網の目によつてお互ひに隔てられ各自は極端に己を主張して行く。しかもかうせずして吾々は現存して行くことが出来ないのである。有島は神——個人と次第に掘りきげて行つた。こゝまでは割合困難を感じずに困難があつたにせよ少くともそれは思想上の苦悶に限られてゐたのである然し神——個人となつてくるとさうは順序よく進んで來ない。それは何故であるか。明治時代の日本においてそれが如何に急進的であるにせよ神——個人は結局ブルジョア思想の所産たるに止まり従つて問題は只頭の中だけで進んでゆけばいいのである。然るに神——個人となると最早、そ

それは思想上の變革たるに止まらず全生活の變革となつて来る。こゝに深淵がある、幸にしてめくら滅法にこの深淵を越えることの出来た人間は神—個人—社會となる事が出来たのであるが大抵の人間はこの深淵の此方で淵をのぞく。淵は深く暗い。一寸躊躇する。そのうちには引返す人間もある。飛ばんとして飛べず引返さんとして引返されず、思ひ余つて淵のなかへ飛こむ人—實にわが有島はこの一人に外ならなかつた。かくして有島の個人主義は破滅した。この個人主義の破滅といふことのなかに歐洲大戦争により引續く好景氣にめぐまれた日本勞働運動の進展に伴ふプロレタリアルの勃興といふ客觀的情勢を念頭に置かねばならない、否逆にかうした情勢こそが有島のチレンマを■らした原因なのであるがこのことについては前回でやや述べたのでこゝでは略す。

有島は「文化の末路」のなかで三つの方向を指示してゐる。いつまでも自己僞まんによつて従來の民衆がつくりあげた文化の可能性を信するか。そしてその境地にあつて自らをその代表的英雄に仕立て上げるか。或ひはその合成力を見限つて孤獨の一路をさびしいながら踏みとげるか。或は第一の時期にある民衆の中に投じてその民衆的文化の渦中に溶けこむか。……である。一は大抵の無反省な人のたどるところながら一度反省の目覚めた人には到底堪へべくもない。第三の道は深淵をひと思ひに渡つた人——とすれば残された第二の道は最も香ばしくない惨めな道である。有島はもちろん第一の道を踏んで行くことは出来なかつた。誠實な彼は到底自己僞瞞によつて従

來の民衆がつくり上げて來た文化の可能性を信ずることが出来なかつた。といつて第一の時期にある民衆の中に投ずべく彼は余りにもブルジョア文化の傳統を血にうけてゐた。これは結局彼をして自らの意識思想、教養がブルジョアのものであつてプロレタリアのものでないことを悲くも宣言したに過ぎなかつた。残された第二の道——これは孤獨の道であつたが有島にとつては孤獨の道をゆくべく熱情がありすぎた。彼は勃興しつづける民衆の合成力を——社會をおして行くところのその素晴らしき力——信ぜずにはゐられなかつた。かくして有島はついに深淵の前に立つた。これは文字通りの人生のゆきづまりであつた。かれは一步も動くことが出来なかつた。まじめな彼れは安易の道を求めて再び引返さうとはしなかつた。かれは淵の前に立ちつづ終日終夜、淵の底を埋めてゐるまつ黒ないひ知れぬ不安をのぞいてゐた。人生の夕暮はすでに近づいてゐた。深淵の底に低く填まつてゐた暗は次第に浮き上がつて來た。遂に深淵そのものが暗の中に閉ざれてしまつた。有島は間近に闇を感じた。もはや深淵に對する底を見るやうな恐怖はそこにはなかつた。深淵とも見わけのつかぬ虚無の闇があるのみであつた。そしてその闇のたゞ中から一羽の虚無の大鳥が不吉な空恐ろしい羽ばたきをたゞえて飛んで行つた。有島はわれにもなく驚いた。がその瞬間彼は闇の深淵の中に自らを轉落していつた。「京城日報」昭和五年二月一九日朝刊六面

芥川の作品を特徴づけるものは？と今更述べ立てるまでもなく多くの評家が筆をそろへて述べてゐるやうにそれは理性の鋭さである氏は最後まで理性の人であつた。現に「自殺者自身の心理をありのまゝに書こう」とし、死の方法そのものについても最も苦痛の少い嫌悪を感じない、しかも最も効果的な方法を選んだことにおいて明白にされてゐる。或はこれを近代趣味的な術ひとでも一口にいつてしまへばいつてしまへないこともないだらう。しかし幾分の誇張が許されるならば理智を理智によつて弄び、さうしたことによつて生れて来る理智そのものに伴つて生れる一種の感情といつたやうなものも氏の作品全體を通じて流れてゐる基調ではあるまいか。それは一般のリアリズムに見受けるやうな單純な一直線に進む道ではない一面理智による分析の尖鋭さは飽までもこれを鋭くして行くと同時に一面またこれに伴つて来る錯綜した感情のもつれ——こゝに作者自身の極めて主観的な氣持が反映されてこれが種々な曲線を描いて進んで行く道である。有島は彼自身は文學的手法においては全然リアリズムを奉ずるとはいひながらそこに舊來のロマンチズムにいろどられた幾多の誇張的感情は見逃せない。これは有島個人の風格より生まれる熱情のしからしめたところである。かつまた氏の最後を最も華々しく、惡くいへば合ゴシップ的たらしめたところの美しき女性の存在は（これはまた氏のフエミニズムの結果にほかなら

い）末路とはいひながら何等かのはなやかな一點を添ゆるに力あるものであり、従つて絶望的な最後の割合に恰も悲劇の終局を見るやうな浪漫的なゆとりのある多少あつけない審美的氣持ちが汲取り得られるのである。ところが芥川の死においてわれ／＼は有島にみるやうな浪漫的な何もをも見出し得ないのである。そこに横たはるものはドス黒い不安と病的な神經の動きと右にも左にも動きのとれない行きづまりである。これを色づけるべき如何なるはなやかさも見つけることは出来ない。一面からいへば死ぬることによつて死そのものを弄んでゐるときさへいはれるであらう僕はこの二年ばかりの間は死ぬことはかり考へつづけた僕のしみ／＼した心地になつてマインデルを讀んだのもこの間である。マインデルは抽象的な言葉で巧に死に向ふ道程を描いてゐるに違ひない。が僕らはもつと具體的の同じことを描きたいと思つてゐる。家族達にたいする同情などはかういふ欲望の前には何でもないといふことは芥川をして氷のやうに澄み渡つた病的な神經を持たしめたのである。社會的條件家族的條件も「なんでも正直に書かねばならぬ義務を持つてゐる」芥川にとつては寧ろ從屬的な位置にあつたであらう。結局行くべき所に行き着いたといふ感じを私は彼の死に對して抱く。神人——社會ともいふ一般的な分析の過程が神人——で止まると同時にその奥底にすむ「所謂生活力といふものが實は動物力の異名に過ぎない」ことを見、人間獸の一匹であることを發見した。が更にこの動物力を失つたとするならばそれは無内容の存在——かういふこと

がかりにいへたとして——すなはち死そのものよりほかになかつたであらう。「京城日報」昭和五年二月二〇日朝刊六画)

(八)

彼は好んで「歴史もの」を書いた。當時或る評家はこれを解して古き材料に近代的解釋を加へたものであるといふやうなことを述べてゐたと記憶するが、それはかゝるごく大ざつばな一般論によつて承認されて差支ないものだらうか復讐の一舉を寝た間も忘れぬ大石内蔵之助が遊女の膝枕に陶然とする遊治郎であつたり、才色兼備の細川忠興の妻が宗教狂のしかも極めて覺悟の悪いたゞの女だつたり俳聖芭蕉が極端なエゴイストだつたり、文豪馬琴もたゞ單たる模倣作家だつたり、日露戦役の名將が死ぬ前に禮装の寫眞をとる嫌味家だつたり、彼の理智によつていはゆる英雄烈婦がみなその借着をむごたらしくヒツパがれてゐる。しかもさうした英雄だとか、賢夫人だとかの重さうな、よろひを脱いだなかには自由な何ものよりも解放された氣樂さが漂つてゐる。たてきつた障子にうららかな日の光りがさして老木の梅の影を映し出し、微かに漂つてゐる墨の色を動かす程の音さへない室の中で、靜かに手を火鉢の上にかざしてゐる内蔵の助け、秋の青空に鷹の飛ぶのをホツとして眺める馬琴、自分のかいしやくをした這入つて来た年若きの士を見て耳まで眞つ赤に染る三十八の忠興夫人、さうした極めて人間らしい憑かれることより脱した人の姿は、鋭い解剖のもとに澄

む優雅な感情の流れである。或は「キリシタンもの」に描かれた浪漫的な熱情など、この理智の鋭敏さの裏にある幽かな情操は「鼻」だとか「芋粥」だとかにもられた軽いユーモアの空氣である、朝風に長い鼻を象のやうにブラつかせる和尚の姿はたゞその一景のみで生きる古典的な香の漂ふユーモアの生活である。それから無垢な少女が人妻となり、母となつて幼子を「あはは……」とあやすなかに、貧しいカフエーの女給が戀人とのランデ・ヴーに青葱をブラ上げてゐるなかにも作者はみな獨特の軽いユーモアと理智の鋭さとを多分に表現してゐる。

かくして私は芥川作品を通じて流れる理智とそれより生ずる一種の感情の流れを見るのである。しかもこの理智を縦横に馳驅した結果、それとともに必ず伴ふところのものは技巧であつた。氏はこの技巧といふことを説明して「藝術的感激をもたらしべきある必然の法則を借用することである(點心)といつてゐる。「京城日報」昭和五年二月二日朝刊六画)

(九)

だから技巧をみがくといふこと——小器用さではない——は同時に藝術を完成に導く階梯を意味するものであるこれゆゑに技巧が理智によつてその洗練を増す限り、それは必ず、その効果を考へる上からも、その方法を考へる上からも、意識でなければならぬ技巧のない藝術といふことは存在するこ

この出来ないものである。だから技巧は同時に藝術内容の鑑賞する基準ともなりうるものである。かうした技巧尊重、いはゆる技巧派ともいふべきやうなもの、片影は氏の師夏目漱石にも見うけられるところのものである。考へれば瀨石も理性の人であり、技巧的であり、同様に趣味を多分に持ち合せてゐた。しかも兩人ともに一枚ヒツペがして置いてあげてフンと鼻で笑ふ人の悪さを所有してゐた。私は兩者の間に多くの共通點を見出すことが出来る。それは兎も角として吾々は芥川のいはゆる藝術の意識的活動と稱へ、理智と呼び、理性と叫んだところのものについて、その結果に思ひおよばねばならない氏は「かうした英雄烈婦の假面によつてなされる自己欺瞞を修正すべき理智の存在を否まはしない」といひ、此理智の力によつて英雄の假面をとり去つて常の人間を見烈婦のヴェールを去つて女を見たが私が前にのべたやうにその理智の分析に伴ふ一種の感情——具體的にいへば古的典趣味的傾向——は果して急進的破壊的な理智の分析ととも必然に生じて来るものであらうか？復讐の一念より解放された内蔵の助が馥郁たる梅の香に酔ながら切炭の火鉢に手をかざしてゐる姿——さうした風雅な情景は事實ありさうに思へる。がこゝに問題が生ずる。氏は藝術を論じて次ぎのやうにいふ「藝術活動はどんな天才でも意識的なものだといふ意味は倪雲林が石上の松を描く時にその松の枝をことごとく途方もない一方へのはしたとするそのときその松の枝をのびしたことがどうしである効果を畫面に與へるか。それは雲林も知つてゐたかどう

かわからない。がのびした爲めにある効果が生ずることは百も承知してゐたのだ。もし承知してゐなかつたとしたら雲林は天才でも何でもない。一種の自働個人なのだ」(點心)といつてゐる。

こゝでわれわれは考へる。氏が藝術活動を意識的なものとする、その藝術活動の根柢にすむものは何であつたか。私はこれを氏の有する個人的趣味性の結果に求めやうとする。だから「或る日の大石」を例にとれば、お預けになつた後の大石のいつたり、した古典的風格、何時の間にか娘が細君となり母となつて「あばば……」と子供をあやしてゐるその奇妙な對象、葱をブラつかせながら戀を語るその悲喜劇な場面——さうしたものがすでに作者自身の持つて生れた——社會的條件や教養の程度から来る一切のものをひつくるめて——彼一個の趣味より生じたものではなからうか、作者の頭に浮んだモチーフそのものは、すでにかうした場合に彼自らによつて局限されてゐたのである。で問題は自ら逆轉する。すなはち理智の解剖といふものは結局かうしたモチーフをよりよく實現するための手段技巧に過ぎなかつたのである。だから決して理智そのものが氏の作品にあつては獨立の存在を許されぬものである。作者自身の趣味判断によつてモチーフを取捨する——ブルジョア藝術の共通の缺陷は聰明なる氏をもつてしても遂に免れることの出来ない道であつた。「京城日報」昭和五年二月

(十)

かうした芥川の趣味の世界——種々の要素から成り立つが煩雑をはぶくため古典趣味といふ——にあくまで閉ぢこもつてすべて外界に目をとざして、ひたすらこの親密な彼獨特の世界に雄飛躍出来ればそれにこしたことはないのである。けれども「理智の追求」といふことは近代知識人の有する最重要な特徴である限り、それは求むべくして得られ難いものである。氏の趣味、氏個人の意識的藝術活動實現のための有力なる方法であつた理智は、近代生活の發展に伴つて必然的にそれ自身發展して逆に氏の趣味性その他のものにまで批判を加へなければならなくなつたのである。かくして趣味と理性は氏自身のなかで激しく争はねばならなくなつた。氏はかうした状態を次ぎの如く述べる。「僕の安住したがる性質は上品に納まり返つてゐるとそのまゝ僕は風流の魔の子に墮落させる惧があるこの性質が吹き切れない限り僕は人にも僕自身にも僕の信するところをはつきりさせて自他に對する意地づくからも殻の出来ることをふせがねばならぬ。追々僕も一生懸命にならないと浮ばれない時が近づくらしい。」

意識としては上品に納まり返り風流の魔の子に墮落させるところの有階級の意識形態である。しかも理性はこれを破壊せよと迫ることで争ひは益々度を加へ一面逃避への欲求もさかんとする。逃避への一途として「宗教」といふ有難いものがある。宗教は阿片であるといふ。だが阿片は誰にでも飲めると

いふ譯にはゆかない。ゆえに宗教によへるものはごく限られた人でしかない。

氏もまたこの選ばれた人のなかには見出し得なかつた。何ゆゑ「恐ろしい四ツの敵——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望——僕はいふ言葉を見るが早いが一層反抗的精神の起るのを感じた、それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。」こゝで説明を加へる必要もない。氏自身の言が宗教は氏にとつて如何なるものであるかを明かに物語つてゐる。宗教の本質は信の一字に盡きる。信はある意味では理性を超越し合理性の極限にある。

「信者になる氣はありませんか」と聞かれた時、彼は答へる。「悪魔を信することは出来ませんがね」と。

「では何ゆゑ神を信じないのですか？」

「若影を信じるならば光りも信ぜずにはゐられないでせう」

「しかし光りのない暗もあるでせう」

彼もまた僕のやうに暗の中をゐるいた。が暗のある以上は光りもあると信じてゐた。

かくして神秘的な宗教の世界は理性理智に極限された彼には永劫に鎖された扉であつた。ではその他の政治、實業、藝術、科學といつたやうなものは？これらは皆彼にとつて「恐ろしい人生を蔭した雑色のエナメルに外ならなかつた」すなはち氏の物質主義は神祕主義を拒否すると同様物質主義もまた同様に拒否されねばならなかつたのである。「京城日報」昭和五年二月三日

私はすでに芥川の有する個人的趣味は理性のそれ独自の發展によつてこきされたいつた。しかし理性はまだこれによつてその使命がつかさどるといひ得られない。理性は理性そのものによつて再批判されねばならない。私はかうした過程の萌芽をすでに氏の初期の作品に屬する「地獄變」においてうかぶことが出来る。畫家良秀は親子の情を全然犠牲にして己が娘が焼死死ぬありさまを恐ろしい冷酷さをもつて描きあげた。しかもその結果はどうであつたか。かれはついにわれと我生命を絶たねばならなくなつた。これを簡單に藝術至上主義として片付けられるものであらうか。かれが自己の娘を犠牲にして得たことは、その理性命のずるところに從つた。だがその理性は更に理性によつて再批判されねばならない。彼は理性によつて生き更に理性によつて倒れたといはれるであらう。この意味で「一塊の土」はその理性に徹して解剖の所産である。これらに現れた理性の理性による再批判といふことは、氏の性格より生ずる「ありのまゝを忠實に描き出さんとする」藝術的良心に煽られてその度を増して行く。そして最後にはあの畫家良秀に見るやうな嚴肅な、しかし殘酷な態度がそつくりそのまゝ氏自身の創作態度となつてあらはれて來るのを見る。

「僕は野蠻な歡びのなかに僕は兩親もなければ妻子もない。唯僕のペンカラ流れ出した命だけあるといふ氣になつた」と

いふ悲壯な決心を抱かすめずにはゐなかつたのである。だがそうした態度は果して現實においてどの程度まで實現し得られるものだらうか。創作に現れた良秀さへも遂に生命を絶たすにはゐられなかつたのではないか。まして現實の人においては：。理性が理性によつて堪えられなくなつたといへば、もはや神經に生きるほかはあるまい。「氷のやうに澄み切つた神經」の世界である。だがこれも永續きのするものではあり得ない。生活はますます息苦しくなるばかりである。ピリッとした神經——あらゆる近代的騒音はいづれもこのとがり切つた神經をかき亂すばかりである結局もし理性に終始するとすればわれは當然われく自身の存在を否定しなければならぬのである。もちろんかくなる道には種々の家庭的煩雜と、殊に死の最近に起つた姻戚の一人の自殺にからむいきさつ。そして健康上より來る病的狀態——などが加速度的に加はつてゐることとは決して見逃してはならない。思想的苦しみと、環境より來る苦しみ——これらが錯雜して來たとき遂に來るべきものが來るよりほかに道はないのである。しかも死そのものと遊べる境地に到達したのであつた。かくの如き境地にいたる道程については私がこゝでこと新しく記述するまでもない。一切はこの最近に發表された三、四の作品につけて直接見ればそれが克明に記されてあることはたやすく發見しうることであらう。「京城日報」昭和五年二月二十六日朝刊六面

私はこの表題において有島、芥川を論評するかの如き氣配を明かにしてゐた。然るにその結果においては結局この二人の心境を、しかも主観味たつぷりにたゞ説明したに過ぎないかの觀を呈して來たことに氣づく。これはいさゝか陳腐ではあるが實際的に表題を掲げて讀者の歡心を買つたのではない書いてゐるうちに、つひに批評にまでいたらなかつた。いな、することが出来なかつたのである、われくとしては説明するといふ形式をとらざるを得なくなつたのである。何ゆゑならはその理由は至極明白である。われく自身が多かれ少かれ或ひは意識的にか無意識的にその顛落の道をとどりつゝあるからである。

・ゆゑに鋭に對立してゐる三つの階級の間に介在して日本の知識階級はまさしく生活的、思想的根據を失ひつゝある。知識人の階級的苦悶——といつたやうなものは日に日に先鋭化して行くやうに思はれる。それには生活難とか、失業とか、就職難とかその他種々の外的社會的諸條件がその重壓をますます加へつゝあることは事實である。がこれとともに内省の目も歩調を一にして深く洞察して行く。しかも斷えず生活の脅威におびえてゐる知識階級の生活は……それゆゑに不安と焦躁と絶望と……倦怠と力なき愛によつて充滿されてゐるのだ。そしてその灰色の生活が求むるところのものはいかにした一切の物憂い灰色からのがれやうとす

る綠色へのどうけい——恒に幾度か宣言され、挑戦されに拘らず依然として「理論は綠であるが生活は灰色である」のである。なぜなら知識人は意識的に目醒めてゐないのだ。かくして傷ついた没落の過程にある知識人は、そのじめくした暗黒のなから、たゞく明るくて朗らかな笑ひを求めようとしてゐる。……カフェエ、ダンスホール、スポーツ、マージャン、トツカビンとサツポロピールのけんらんな電飾のなかに歡樂の籬の蔭には笑ひの賣女賣男が忙しい急行時の一等停車場のやうに簡單に、貞操の歡樂のティツケットを賣つてゐるではないか、そしてジャズで踊つてリキユールでふける感傷世界の陶醉、ウエートレスの爆發するやうな媚笑と散彈のやうな冗舌と、あらゆる一切のレヴューのスピードの刺戟のなかに末梢神經と未だに残つてゐるかびのはえたやうな天才主義的、個人主義的迷ものなかに……にはゞ一切のルンペン・インテリゲンチヤはまさに逃避しつゝある。

文明と神經衰弱はつきものだ。といふやうないひ草はもはや古典的風景に屬しつゝある。こんなしやれみたいなことをいつてわれくはすましてゐられなくなつたのである。内省とか、自己批判とか、あるひは自我の分析とか、知識人は種々な色眼鏡を通じて「自己」を透視せんとした。しかしながらそれは結局何の役にも立たなかつた。ますくわれくをして鳴かず飛ばすの中間的存在の意識を深からしめたのみである。その結果はアダリンとか、チアールとかの薬を

のまねば眠られないのだとか「神經のみに生きる」だとかの變態的な心細い状態になつて来た。そしてそれから抜け出てくるものは霖雨の中をぬれそぼれて行くぢメくした氣持、そしてヒステリカルな浪人根性、妙にひねくれた高踏的な趣味、末梢的な反逆氣質、その宣傳において無類の勇者で、戦士で努力家であり、その實證すべき生活戦線にあつては實に臆病で、回避的で、卑怯者で、かつ不眞面目で、豪慢である等々……といつたやうなものである。現代の知識人の一般の風潮とは恐らくこれに似た感情ではあるまいかだがかうした感情はいつまで抱いて行かねばならないのか。實際われくはこんな自分で自分を苦しめるやうな考へには飽きくしてゐるのだ。つねにバツタの觸角のやうにピリくとしてゐる神經などには愛憎がつきてゐるのだ。もつと鈍重は底力のある神經が欲しいのである。右とか左とかは暫く抜きとつてもいい。兎に角もつと健全なクリヤーな氣持ちになつてこの大地を踏みしめて見たいのである。(京城日報一五年二月二八日朝刊六面)

(完)

更に知識の限界内でもいつても同じことだ。絶対の眞理といふやうなものがあるまいが、「物は存する」といふ認識間違ふときがあるまいが、「物は存する」といふ認識は相対的な絶対なのだからナイーブである。がこの素材

は一元的な實際的な物の見方こそがわれくを活かしうる唯一の道ではなからうか。それが如何に思辯的曲學者によつて論駁される時があつても、この見方がもつとも現在のわれく、に即した見方なのである。一度は思辯の彼岸に祭り上げられた神學、哲學その他一切の學問をその優位の王座から引ずり下ろしてしまふことによつて、舊來の知識人に離反するとともにこゝに健全な芽生えが生ずるであらう。と同時に知識はその生活、そのなかに含まれた矛盾を解消することによつて、初めに底なしの不安から救はれるのである個人主義に代る集團主義的イデオロギーの徹底と、末期のけいれんの反動を内含しつゝある資本主義への偏りなき檢討暴露——そして自覺しつゝあるインテリゲンチヤのかうした不安から救はれようとする眞摯な努力精進。そして階級的所屬の明白——われくはこゝに眞の意味のモダン・エーヂの黎明を見る。

知識階級は没落しつゝあるといふ。だがこれはたゞ單に燃え残りの蠟燭に等しいものだらうか。舊來の知識人はみなかゝる没落の道をたどつた。しかしモダン・エーヂの知識人はその階級的自覺を有するとともに「没落」そのことに意味を見出すであらう。知識階級が漸次階級としての存在を維持し得られなくなる、そのことが同時に知識人そのものの自覺と希望とを持たしめるものではなからうか。この不合理な面白くもない實にメランコリーな灰色の今日において、健全な歩みをとることは實にわれくにとつて必死的努力

である。かいらいとあゆと誤魔化しと虚偽の今日において、正しい道を歩んで行くといふことは實に六ヶ敷しい棘の道である。しかし思想善導と贈賄、緊縮と失業とが皮肉にも隣合する今日である。われくは恒に現實に對する認識と批判とを忘れてはならない。われくはこのためにはあらゆる感傷もその足下に踏みつけて行かねばならない。それは「命がけの飛躍」を必要とする。われくはこれによつて生き甲斐を感じようとするものである。

チエホフの「櫻の園」の大學生はいふ。

「私は幸福を感じます」と

だがこの幸福は今の世には實に命ととりかへるのである。この意味で有島——芥川的存在は幸福と生命をとり代へ損ねたともいへるだらう。(完) (一九三〇年二月十八日) (京城日報) 昭和五年三月一日朝刊六面

作家印象記 (2) 芥川龍之介氏

芥川さんは先づその長髪が眼につき、丁寧にお辭儀をされるので髪が前にかぶさつて疊に惹き、顔を挙げながら素早く両手でそれを掻きあげられるのが癖だった。

田端の家のあの二階の日本間が初めの頃の書齋で、その書齋の感じも主人の趣味を現したのに見えた。私は漱石の書齋を寫眞で見たことがあるが、それとよく似てゐた。床の

古木鐵太郎

上といはず、袋戸棚や疊の上まで一杯の本が立てたり重ねたり、その中には和綴の漢書なども多く、さういふ部屋の真中に小さな紫檀の机が置かれ、床を背にして此方向きにつきんと坐つてをられた。

よく話もされるが、何よりも知識の豊富さといふ感じを受けずにはゐられなかつた。殊に繪畫の話が好きで、レムブラントを崇拜する心が強いしかつた。エチプト彫刻の寫眞やブレークの複製などが何時も床に立てかけてあつたのを覚えてゐる。また古い陶器なども澤山蒐めてゐて、皿など出して來て見せながら

「マルクスとか何とかいつてみても、藝術には及ばないですなあ……」といつて、その皿に上げしげと見入りながら、「やはり、技巧だなあ！」と感嘆されたりした。

その二階の部屋の手擦越しには庭の立樹が繁つてゐた。芥川さんはふと其の方を見やりながら、

「かうして此所からあの木の葉の動くのを見てゐると、ちつとも飽きないですよ」と、そんなことをいつたりされた。

ある日、私は友達三人ばかりと芥川さんを訪ねたことがあつた。二階で少時話してゐると芥川さんは一寸階下に下りて行つて、上つて來ると

「あの玄關にあつた本は誰のです？」と訊かれるので、私が自分のだといふと

「あれはいゝ本ですね、實に綺麗な小説ですね！」といはれた。それはアンドレ・ジイドの「背徳者」だつた。その譯本

が出たばかりの頃で、私はそれを電車の中などで楽しみに読んでゐたのだつた。

最後に私が芥川さんに會つたのは、芥川さんが自殺する數ヶ月前だつた。芥川さんが鶴沼の東屋に行つてゐる時「改造」で「短歌の形式は亡びるだらうか、如何？」といふ質問の原稿を頼みに行つた時だつた。その時は一寸久しぶりに會つたので、芥川さんの様子が何となく變つてゐる様に感ぜられた。あの長髪が刈られて、軽々した五分刈になつてゐた。それは

確かに春の晴れた午前だつたが、東屋の玄關傍の應接間で、二人で對坐してその質問の原稿を頼んだ。芥川さんは短歌の形式は亡ぶまいといふ意見だつた。その原稿を直ちに其所で書いて貰つた。芥川さんは原稿を書きながら、中途で時々自分の部屋に起つて行つたりされた。拭きこんだ光つた廊下をスリツパの足音軽く歩かれたあの後姿が今も私の眼にはつきりと残つてゐる。「京城日報」昭和十四年六月一日夕刊四面